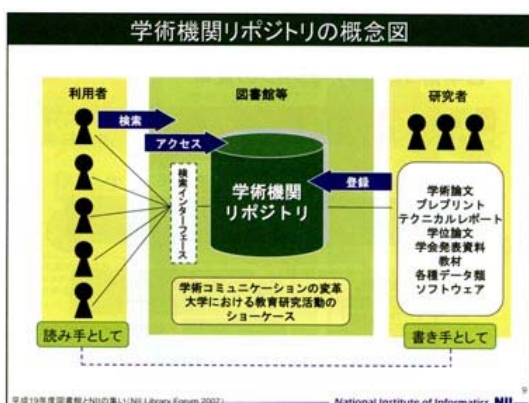


■ 巻 頭 言

附属図書館長 市村 孝雄



2008 年の年度初めは、図書館情報電子化の話題からお届けします。

“学術機関リポジトリ”なる新語が登場して4年が過ぎました。“リポジトリ”とは、大学の知的生産物を電子化して集積しネット上に公開する“電子アーカイブ”。今や、全国70の大学で構築が進み、世界では900以上が稼働しているとか。教員の成果発信と大学のアピール力を高め、社会への情報提供をおおいに広める次世代学術情報メディアと期待されています。

ここ山口県立大学でも、ようやくこの春「山口県立大学学術情報（電子版）」が誕生し、そのウェブ公開が始まりました。学部紀要、大学院論集などに載った最新の学術研究成果が速く広く社会に提供されます。

今後、学術誌に発表された教員の原著論文、学位論文、学会発表などのフルコンテンツを、ウェブ上で検索・閲覧できる本格的なリポジトリに成長させたいものです。学生教職員の皆様の斬新なアイデアとご意見を待望しています。どしどしお寄せください。



■ 寺内文庫収蔵資料の燻蒸を行いました

3月17日から10日間の予定で専門業者に委託し、寺内文庫収蔵資料の燻蒸作業を行いました。文庫内には和装本、文書、洋装本合わせて約18,000点が納められています。

燻蒸作業は、資料についての紙魚などの殺虫と防カビ処理を行うもので、おそらく初めての処置だと思われます。作業は当館2階の学習室と学術雑誌室に燻蒸のためのテントを設置（右上の写真）、ダンボール箱に入れた和装本、文書にテントを密封状態にして投薬が行われました。（右下の写真）

洋装本は寺内文庫内に毒性の弱い薬剤を直接投薬する方法にしました。これと併せて行った空調機器の交換により、収蔵資料の価値にふさわしい保存状態と環境を確保できたものと考えています。

引き続きこの環境を維持し、従来通り、県立大学の貴重な文化遺産を内外の研究者に公開、専門的な研究需要に応えることにしています。

(町田)



■ 特集 図書館の仕事はいろいろあって面白い！ 発見もあった。

～2月中旬から3月初旬まで在学生在が図書館スタッフとして活躍しました～

● 図書館の仕事体験



学生スタッフとして2年生を中心に、3年生と1年生が加わって図書館の仕事体験してもらいました。

実施期間は平成20年2月13日

(水)から、業務内容は蔵書点検(書庫・開架・看護学部棟図書室・大学院博士課程)、書架点検(蔵書点検と同じ箇所)、図書と雑誌の整理、目録カードの除籍、カウンター業務、研究室分置図書の返却、選書、検索等多岐にわたりました。

最も大変だったのは、書庫の蔵書点検でした。所在が附属図書館になっている図書は開架図書が4割で、残りの6割が書庫の閉架部分にあります。その書庫も木造モルタルの旧講堂・本館書庫1層・2層の3箇所に分散しており、どれも良い作業環境とは言えません。

初日はこの冬一番の大雪でした。旧講堂から作業開始の予定だったのを急遽変更して、本館書庫2層から始めました。本に貼ってある図書バーコードをハンディターミナルで読み込んでいきます。ハンディターミナルが7台なので、7人ずつ1時間ごとにローテーションで仕事をしてもらいました。残りの学生は暖房のある閲覧室で開架図書の書架点検をしてもらいました。

2日目にいよいよ旧講堂に取りかかりました。室温は氷点下1度。本や建物内が冷え切っているので、学生支援グループと安光先生が配慮され、入試の警備者用ストーブを持ち込んでくださいました。学生スタッフは、かじかんだ手を温めながら、みんながんばって、約22,200冊の点検を半日で済ませてくれました。



続いて書庫1層、開架、看護学部棟図書室、大学院博士課程と合わせて13万冊余りを点検しました。

図書整理では、購入した図書がどのような過程を経て書架に並ぶかを体験してもらいました。選書・所蔵検索・発注・納品・検収・支払・受入・

図書データ作成・装備・配架という作業の流れがあります。

作業開始から5日間は蔵書点検のため図書館は休館しました。6日目以降は開館するので、一人ずつカウンター業務を体験してもらいました。貸出・返却・配架・複写・書庫内資料の出納・購入図書や雑誌の手続き・他館利用の紹介状等いろいろあります。

図書館の仕事は多種多様にあります。これらをできるだけ経験するように職員の方では配慮しました。



最終日、4人の学生スタッフに感想を聞いてみました。

● 感想を聞いてみる

安光 図書館で働いてみてどうでしたか？

森本 仕事はいろいろあって最初の記憶がない。とにかく旧講堂の作業は全部大変でした。力仕事が多いのにビックリ。日頃、書架の一番上の段の図書は見えませんが、今回椅子にのって書架点検をしたので「こんな図書があるんだ」と認識を新たにしました。

安光 この図書館は書架の高さが高いからね。

辻村 高いと言えば、寺内文庫の木製書架は9段あるので天井にくっついてます。

安光 書架の間隔も狭いので車椅子の人には使いにくいと思います。

原 請求記号順に本を並べるのが大変でした。昨日は看護でも本館でもそればかりやっていから「今日は死ぬな」と思いました。

辻村 原さんが大変と言うのもわかる。県立大学の図書館の請求記号は小数点以下3桁まで分類するから、最大8桁のものがあります。例えばR518.523とか。

安光 書架にこう整然と並んでいるのを見ると、ラベルの位置がきちんと何センチと決まっているのがわかるでしょう。

原 今まで図書を請求記号の所にきちんと戻していなかったけど、書架点検の仕事がこんなにキツイとわかったのでこれからは正確に元に戻そうと思いました。

辻村 特定の本は請求記号で探すからね。

毎月、月末休館日に書架点検をしています。違う請求記号の所に戻すよりは、いっそブックエンドの外に置いてくれたほうが処理しやすいね。

原 たしかにそういう本がありました。わかりやすかったです。

辻村 それと、貸出手続しないまま本を持っていかないで欲しい。

原 カウンターをした時にそういう図書がありました。ブックポストに返却されたものでした。

垣下 いろんな本があって作業中に「あっこれ読みたい」と思った本もありました。図書館の仕事は手の込んだ作業が多くて、間違ったら大変だと思いましたが、いい勉強になりました。

三上 1冊の本が本棚に行くまでにこんなに沢山の作業手順があることにビックリしました。



就職のことを考えている時期なので「こんな仕事もあるんだ」と思い、いい経験になりました。

● 学んだこと・感じたこと

- ・書庫にいろいろな本が大量にあるのに驚いた。中には1冊36万円もする高価なものもあった。今後勉強するのに書庫資料をおおいに利用したい。
- ・書庫で大正14年の古い本を見つけた。
- ・不明図書を見つけ出した時がうれしかった。
- ・重たい力仕事を裏でしているのがわかった。
- ・書架点検の作業の時、変な場所に置いてある図書を見つけて元の位置に戻すのが大変だった。今後は利用者として所定の位置に本を戻すようにしたい。
- ・ハンディターミナルで図書バーコードを読み込む時、ピッと音がするのが面白かった。
- ・ハンディで読み取ってみてはじめて蔵書数の多いことに気づいた。
- ・仕事ができ楽しかった。また、図書館で働きたい。
- ・今まではカウンターしか知らなかったが、いろんな仕事を体験したので全体が見えてきた。
- ・旧講堂は寒いし、本にカビが生えてるし、ほこりだらけだし、本は重いし体力のいる仕事だと

わかった。

- ・旧講堂がすごく寒くて手が動かなかった。(氷点下1度でした)
- ・旧講堂で本学の歴年の卒業アルバムを見つけた。
- ・レーニンの漢字表記を知って驚いた。(列宁全集のこと)
- ・カウンターの仕事が楽しかった。
- ・寺内文庫の古い本を見て感動した。
- ・研究室分置図書が返却後どのようにして開架書架や書庫に並ぶのかがわかったし、いつも本がきちんと並んでいるということがすごいことだとも感じた。
- ・選書で、みんなの読みたいもの・役に立つものを選ぶのが難しかった。
- ・選書の時、自分が卒論で書きたいと思っているテーマの本を選んだ。
- ・選書が楽しかった。もっとやりたかった。図書館で仕事してよかった。
- ・カード目録の除籍は複雑で、根気のいる仕事だった。
- ・バーコードラベルを図書に貼る時とても緊張した。
- ・司書の授業だけでは理解できなかった部分がたくさん見えてきて勉強になった。
- ・「自殺学」という本があった。自殺に関する図書がたくさんあるのに驚いたし、実際自殺者が多い世相を反映していると思う。
- ・自分以外の他学部の専門図書や雑誌にふれることができた。
- ・作業の種類が多いので毎日覚えるのが楽しい。
- ・付属資料の装備が面白い。
- ・カウンター職員が入館者数を数えているのを今まで知らなかった。
- ・看護棟図書室は専門書ばかりで驚いた。
- ・看護棟図書室に初めて入った。本館に比べてきれいなのに驚いた。
- ・看護棟図書室の図書の並びを点検した。すごく乱れていたの、所定の位置に戻すのが大変だった。
- ・図書館のさまざまな仕事を体験したので、これからはその大変さを考えながら利用したい。



(辻村)

■ (寄稿) 図書館に住みたい

平成19年度 科目等履修生 上野 友稔

この一年、図書館司書資格取得のために科目等履修生として県立大学で学び、4月から大学図書館司書として仕事をするようになった私は、できるなら図書館に住みたい…。というのは現実的には難しいですが、そう思うほど頻りに図書館を利用しています。このような意識をもつきっかけとなったのは、G.W.ライプニッツという人物の存在でした。

微分積分の発見をめぐってニュートンと争ったことで知られるライプニッツが、一生を通じて図書館司書として仕事をしていたことは、余り知られていません。その仕事ぶりは非常に優秀であり、以後の図書館思想に大きな影響を与えたにもかかわらず、です。例えば、当時作成された目録は現在でも大切に保存されていますし、ゲッティンゲン大学図書館は彼の思想を具体化して設立された図書館とされています。また、1676年以降、図書館内に住居をかまえ、その後も図書館が移転するたびに一緒に引越しをしたと伝えられています。



次のようなエピソードもあります。現在でも多くの図書館が資料費の不足に悩まされていますが、それは一昔前でも同じこと。そこで、ライプニッツは図書館の空き地を利用して養蚕産業を行おうとしたり、印刷業に手を出したりして、資料費を確保しようとしました。このような彼の図書館に対する情熱と企画力は、これから図書館司書を目指す学生の皆さんにも参考にしてもらいたいと思います。私から見て、彼は図書館司書としてのまさに理想像とも言えるのです。

このように図書館業務に関してはすばらしい業績を残していますが、ライプニッツ自身の著作物については少々困った部分がありました。それは、彼の膨大な数のメモや書簡はまったく整理されないまま、彼の死後に残されたということです。これが理由で、まもなく没後300年を経ようとしている現在でも、彼の全集の出版は完結していません。

おかげで、あるといわれていた図書館に関する断片を含む著作も、2004年になってようやく出版されました。しかし、残念なことにこの資料は近くの図書館では所蔵されていませんでした。

そこで、私は「文献複写」という大学図書館のサービスを利用して資料を取り寄せました。これは、他大学の図書館が所蔵している文献を、図書館を通じて複写を依頼し郵送してもらうサービスです。このサービスを利用すれば、遠くの大学にわざわざ出向いて資料を閲覧したり複写したりする必要はありません。学生の皆さんがレポートや卒論を書く際に利用することになる便利なサービスです。

文献複写以外にも、大学図書館では学生の皆さんを支援するためにさまざまなサービスが用意されています。しかし、そのようなサービスも利用されなければ意味がないですし、利用してみなければそのサービスの良さも分からないのではないのでしょうか。試験の前やレポートのためだけに利用する、というのではもったいない。

ライプニッツは図書館を「すべての時代の偉大な人たちとの話し合いの場」と表現しています。友達と会って話をしてくる、という感覚で図書館を訪れてみてはどうでしょうか。これまで気付かなかった図書館の魅力がきっと見えてくると思います。

◆ 編集後記



本号は2月中旬から3月初旬まで、図書館スタッフとして働いてくれた学生たちの特集記事をメインとしました。厳寒の季節、大変でしたが、学んだこと、感じたこと、色々とあったようです。職員も活気を感じた一ヶ月でした。

そうこうする内に4月、桜の季節になり新学期。附属図書館も、新たな気持ちで課題にチャレンジです。
(町田)

■ 編集・発行/山口県立大学附属図書館

〒753-8502 山口市桜島3-2-1

TEL. (083) 928-0522 FAX. (083) 928-0279

E-mail: lib@sakura3.yamaguchi-pu.ac.jp

http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/index.php?M_ID=9